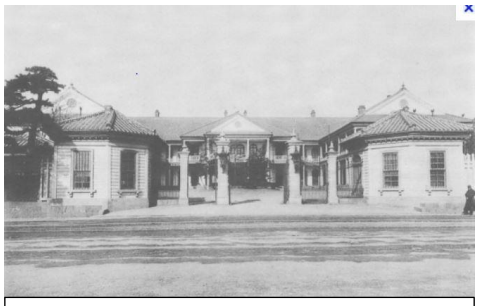
北里柴三郎の歩んだ道（3）～内務省の官僚となる～

北里は、明治 16（1883）年 4 月に東京大学医学部を卒業しました。前途洋洋たる青年に対して、地方の医科大学の校長、県立病院の院長等の就職話が数多くありましたが、北里は全て断ります。「ヨーロッパに留学して、病の原因と治療法を突き止める」という、マンスフェルトが示してくれた道を進みたいと考えていたからです。



内務省と大蔵省合同の木造庁舎
【提供　財務省】

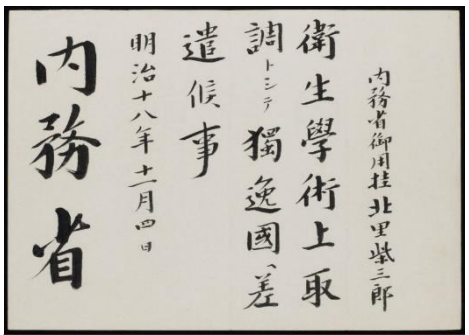
そんな北里が選んだのは、内務省衛生局に就職し、官僚になることでした。当時の内務省は、警察や土木、衛生等、国内の行政のほとんどを司る官庁でした。北里が衛生局に勤めることができたのは、東京医学校の校長だった長与専斎が初代局長に就任したことも大きかったようです。

医術開業試験主事として長崎に出張した時の写真（左が北里）
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念室

内務省における医者としての北里の最初の仕事は、ヨーロッパの国々がそれぞれ決めている医療関係の制度等についてデータを整理し、分析することでした。熊本の古城医学校ではオランダ語を、東京大学医学部の時にはドイツ語を習得した北里にとっては、うってつけの仕事でした。

職務に取り組み始めた北里でしたが、ドイツに留学していた緒方正規の帰国によって、早くも転機が訪れます。古城医学校の同級生で、東京大学医学部の先輩であり、内務省衛生局の先輩でもある緒方は、ドイツのベルリン大学衛生研究所で最新の細菌学を学んでいました。帰国した緒方は、その知識を日本の医学界に広めるべく、東京大学医学部で教えることになりました。緒方は、内務省東京試験所にて研究室を構え北里を助手として細菌学の手ほどきをします。このことが、北里の運命を大きく変えることになりました。緒方の研究対象は、「脚気病原に関する試験」、「結核牛の解剖」、「狂犬病毒の研究」等でした。緒方の助手として働くことによって、北里は細菌学の道に足を踏み入れることになったからです。実はこの助手指名の裏には、緒方はもちろん、局長の長与の配慮があってのことでした。有望な若手をコッホ流の細菌学の研究手法に触れさせたい、という長与や緒方の想いに支えられて、北里は細菌学の研究に着手します。

そんな北里は、明治 18（1885）年 9 月に長崎で集団発生した原因不明の伝染病の調査において、大きな功績をあげます。当時の長崎は、この伝染病に 4,300 人余りが罹患し、そのうち半数以上が死亡するという大変な状況でした。内務省から調査を命じられた北里は、ただちに現地へと向かいます。到着するやいなや、北里はまず、隔離病院に収容された数十人の患者の便から病原菌を採取すると、これを純粋培養し、顕微鏡で観察しました。最新の知見のもと、北里はこの病原菌を、明治 16（1883）年にコッホが発見したコレラ菌であると結論づけました。これが日本で最初のコレラの菌の検出となったのです。その後、北里は長崎で採取した菌株を東京に持ち帰り、再度検査をしてコレラ菌であることを今一度確かめると、すぐに感染の拡大防止に取りかかります。コレラの治療法がまだ定まっていなかったこの頃において、感染が他の地域に拡大することなく収束できたのは、北里による素早い病原菌の特定と、早期の適切な対処のおかげでした。



ドイツ留学の辞令
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念室

一連の北里の対応を、長与局長はしっかりと見ていました。特に、病原菌の特定に至った実験手法の手際の良さと正確さを高く評価し、北里を緒方のようにコッホの下で研究させるべきだと考えたのです。長与局長は、北里のドイツへの留学を内務省に申し入れました。

こうして、明治 17 年（1884）年、北里が胸に抱き続けた念願のドイツ留学は、自ら示した成果によってついに叶えられることになるのです。